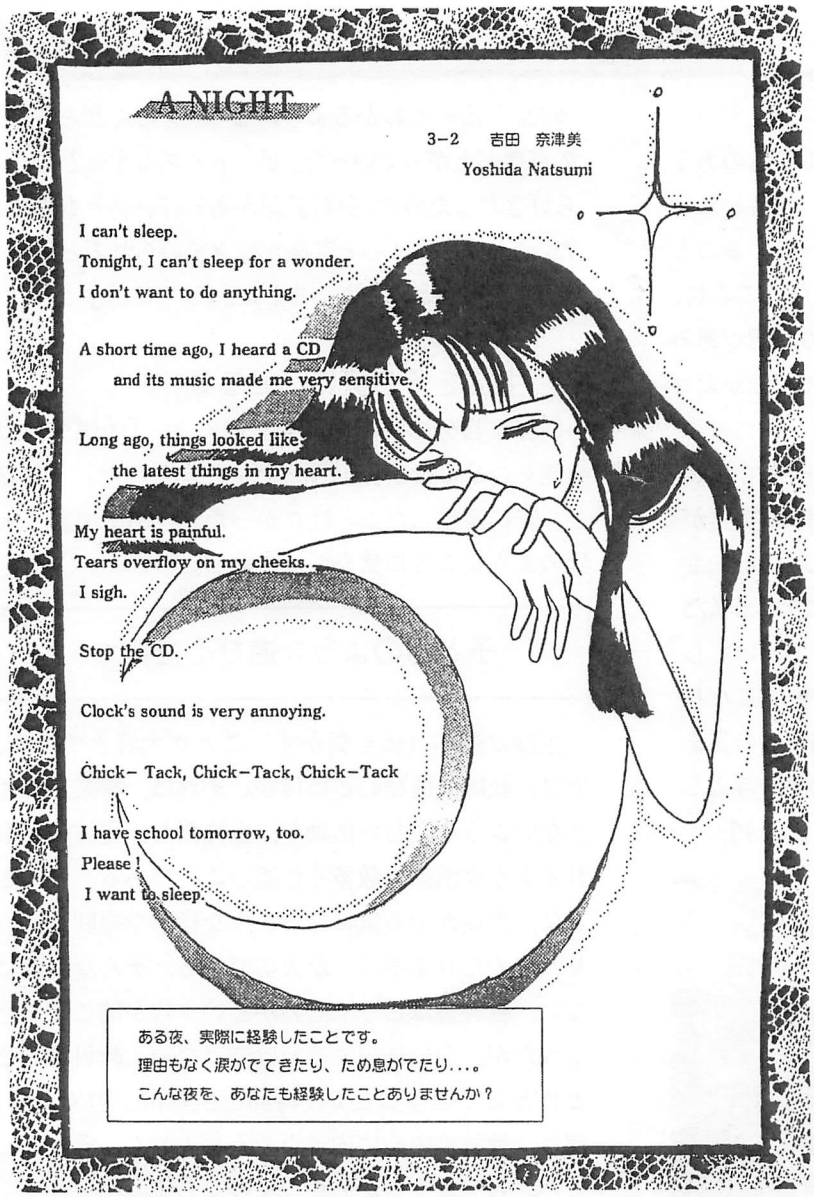
特集 魅せます!! 私の授業
—自己表現と読みとりの指導—



中嶋　洋一氏の生徒の作品から

新しい生徒たちに出会う４月，桜の花の下をくぐって入学する新入生だけでなく，前の学年での反省をバネに飛躍したいとだれもが考える時期。しっかりとした年間計画を立てて英語学習への夢を伸ばしていきたいものです。今月号では中学校，高校とも若さと経験の両方を備えた代表選手それぞれお１人ずつに，これまでの教師としての軌跡をまじえてもらいながら自己表現と読みとりの秘訣を存分に語っていただきました。

●生徒も教師も
“楽しくなる”授業を創る
中嶋　洋一

●力のつく「超」楽しい授業の秘密
—中嶋実践を読み解く
富山新英研サークル

●高校３年生へのリーディング指導
—全文和訳をいかに超えるか
萩原　一郎

●読みとりの視点から実践を深める
—萩原実践をテーマに
神奈川・東京新英研サークル

●英語教師として大きくなるために
—中嶋実践と萩原実践に学ぶ
大浦　暁生

特集

魅せます!! 私の授業—自己表現と読みとりの指導—

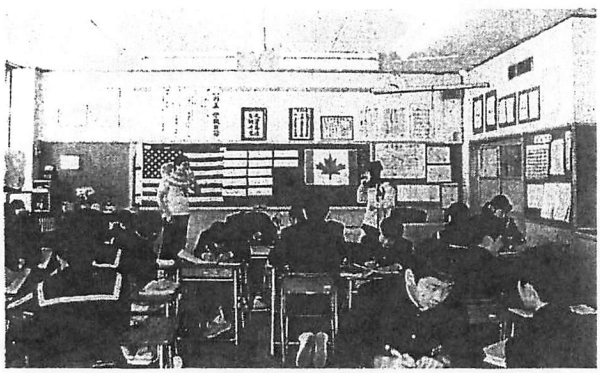
生徒も教師も“楽しくなる”授業を創る

中嶋　洋一

1．はじめに

新聞や雑誌で実践を紹介すると，よく読者の方や編集担当の方から，「ユニークですね」と言われることがある。自分では当たり前だと思っていることが，どうも普通とはちょっと違うようだ。ここに，生徒が卒業する時に書いてくれた授業の感想があるので，それらをご紹介する。私の授業の一端がおわかりいただけたら幸いである。

「最初，中嶋先生の授業が信じられませんでした。歌を歌ったり，ビデオを見たりするだけで，英語が得意になるわけがないと思いました。しかし，先生は私の考えとははるかに違うものを私に，いえ私たちに与えてくださいました。英語が嫌いで投げてしまっていた私が，今ではこんなに英語が好きになりました。私にとって，英語の授業は本当に心の安まる1時間でした。2年間私にたくさんの夢を与えてくださったことを心から感謝します。（R .I.）」



ペアで進行形を使ってドラマの実況中継

「富山に転校してきて，英語が中嶋先生になった。やり方が違うのでびっくりした。ペア学習（明治図書『楽しい英語の授業2』の拙稿を参照）で何かが変わった。みるみるわかるようになった。どんどん英語の点数が上がっていった。ビートルズもずっと前から好きだったので，毎日英語があればいいとも思った。これからもずっと英語が好きでいられると思います。ありがとうございました。（Y．U .）」

2．生徒をその気にさせる術

同僚に自分の授業の印象を聞くと，「中嶋先生は生徒をのせるのが実にうまい」と言われた。なるほど。特に意識したことはなかったが，あえて言うと，次のようなことに気をつけている。

子どものような遊び心を持つ

生徒は遊ぶ（体を動かす）ことが大好きである。では，教師の遊び心とは何か。それは，授業とは思えないような楽しい活動や，生徒たちが主体的になれるような活動を数多く仕組むことである。そのときに，生徒がやる気になるような指示や発問をしたり，誉めたりすることが大切である。そんな時間はない，教科書はどうするのかという声が聞こえてきそうだが，別に無視するわけではない。教科書をまとめとして扱うことで，時間を生み出すのである。実は，教科書中心に内容を教えるよりも，それをまとめとして扱う方が力がつくのである。

さて，私は遊び心を持つようにしていると述べた。私は普段から，何かおもしろそうなこと，授業に使えそうなことを探すようにしている。いくつかその具体例をお見せしよう。

（1）エンピツで隠して音読

ある日，机間指導をしていて，エンピツが教科書の上に置かれているのを見てハッとした。エンピツで本文の１文がスッポリと隠れているのだ。こんな時，ふと遊び心が生まれる。「お互いの教科書の上にエンピツを置いて本文の一部を隠し，音読の練習をしたら面白いんじゃないだろうか」。

しかし，教師が「～しなさい」と一方的に言うようでは興味も半減する。やる気が出るような指示をしたい。音読の練習のときに，ペアで生徒を背中合わせにし，相手に本文が見えないようにする。エンピツを３本用意させ，こう言う。

> エンピツを使って本文を隠しなさい。縦に置いても横に置いても構いません

置くのを確認してから，席を替わるように指示する。そして，「どっちがたくさん読めるかな」と一言。何度もやる。生徒たちは，がぜんやる気を発揮する。音読練習にも力がはいってくる。そのうちに，本文を暗記してしまう。ほとんどの生徒ができるので，最後に「よくできたね。すごいね」と誉める。ピグマリオン効果をねらうのである。

また，長文の内容を読みとるときはこうだ。「これは～について書いてあるよ」と言いながら，

> 実は，途中でえ～っと驚くことがあるよ。そこを見つけて赤で線を引いてごらん

と言い，「いくつ見つかるかな。」と挑戦的に生徒を見る。これで生徒に必要感（やる気）が生まれる。

（2）大きな声で歌えるようになるヒント

歌は大きな声で歌いたい。楽しいからである。心の中で歌っていればいいという意見もあるが，私はそうは思わない。大きな声で歌うと，クラスの雰囲気が高まるからだ。声が出ないのには理由がある。読めないからである。しかし，次の３つのステップによる練習方法で必ず読めるようになる。

> ①単語や文ごとに切って読むのではなく，スラッシュでセンス・グループに切って読む
> ②後ろから読みあがる
> ③歌のスピードに合わせて，エンピツでおいかけながら読む

このときにも，指示が必要になってくる。

> エンピツを紙から離さないで練習しましょう

この一言で集中力が生まれる。練習を積んだ生徒たちは音読の自信がついてくる。比例するように，大きな声が出るようになってくる。

さて，歌は月ごとに曲を決めて歌うだけじゃつまらない。また，遊び心が首をもたげる。それは，

> 学期末にリクエスト・ベスト10をする

である。これを１回経験した生徒たちの歌声は，見違えるほど大きくなる。

実は遊び心がもう１つ。順位予想をするのだ。予想で１位～５位をズバリ当てた生徒には，プレゼント（ALTに頼んで自国のGoodsを用意してもらう）をあげるというのも，意欲を高めるための小技である。そして，最後に学期にやった歌をビデオで見せる。映像は，テレビやLDから録画する。これらは，生徒の意欲を高める（英語を好きにさせる）ための裏のカリキュラムなのである。

（3）「超」楽しく文法を定着

機械的な繰り返しやテストで覚えるのは，外的動機づけである。内発的動機づけで学習を楽しく，しかも定着させたい。たとえば「格の変化」は，トランプの「うすのろ」の要領で定着させる。

４枚のカード揃えをする。それぞれ１枚のカードに格の変化（I, my, me, mineなど）を１つずつ書く。４人～５人で行なう。配った後で，集めたい種類を決め，いらないカードを隣に送る。そろったらビンゴ！　真ん中に置いてある消しゴムを取る。他の生徒も急いで消しゴムを取るが，消しゴムが１つ足り

ない。クラスが騒然となる。こうして，格の変化を全員があっという間に覚えてしまう。それは，生徒にとって必要感のある活動だからである。

説明調ではなく，具体的でわかりやすい指示や発問を心がければ，生徒たちは前を向き始める。また教師が「教科書を教えなければ」という呪縛から解き放たれると，生徒が心を開き始める。

3．ビジョン（年間活動計画）を明確に

さて，私の授業の特徴は遊び心だと述べたが，気まぐれや思いつきで発揮されてはならない。そこで，次のことが重要になってくる。

年度初めにその活動計画を立てる

私はそれぞれ次のように計画を立てている。

（1）1年生の指導の重点

① 逆接の接続詞の but を習った段階で，英語の詩を作る
② be 動詞を習ったところで，What am I？ Who am I？のクイズ作りをする

なぜ but で詩なのか。それは，No や but を使うと，話に広がりが生まれるからである。また，クイズ作りでは，班対抗のクイズ大会を計画して商品を用意するなど，楽しく活動できるようにしておくことも大切な要素であると考えている。

（2）2年生の指導の重点

① 創作童話作り
② if, when を使った詩作り
③ Show and Tell
④ 1つの文に対し，Yes, No の両面から意見を書く

順に説明しよう。創作童話はコンピュータで作る。統合型ソフトを使い，絵もコンピュータで描く。そして，教師は生徒の作品をまとめて童話集を作る。

②の if, when の接続詞を使って詩作りをするのは，夢や空想の世界が描きやすいことと，事象を関連づけられるようになってほしいからである。

③の Show and Tell では，アイコンタクトができるようになるために，生徒たちは事前に教師から原稿のチェックをうけ暗記する。

④では，論理的思考の基礎を作るため，1つの文に対し，Yes, No の両面から意見を書く。

（例）Japan is a good country.

両面から考えることで，論点がはっきりし，自分の考えが深まってくるからである。

①〜④のよい作品は教科通信で紹介する。

（3）3年生の指導の重点

① スピーチ
② 2人ディベート
③ 卒業記念詩集

順に説明しよう。①のスピーチ指導は，ひと味違う。コンピュータ室でするのだ。題は My Most Favorite English Song。曲とスピーチを聞いた後，全員がすぐにコメントを英語で入力する。教師は，LAN（local area network）を使ってよいものを紹介する。よいスピーチの観点やコメントの書き方をリアルタイムで学ぶためである。コメントはそのままフロッピーに保存する。自分の成長を残すためである。

②の2人 Debate は，ジャンケンで勝ちが Yes，負けが No と決めておく。どちら側に立っても意見が言えるようにするためである。最初は日本語で行ない，出た意見を英語でどう言うのか ALT に直してもらう。その後で，再度ジャンケンをし，今度は英語で行なうのである。

（例）Do you like school uniforms？
Writing a letter is better than
talking on the phone.

このように，年間計画を見ると，「自己表現の作品を形にして残すようにしている」ということがおわかりいただけたことと思う。

この計画は事前に生徒に知らせておく。見通しが持てるようになり，受け身ではなく目的を持って活動できるようになるからである。教師が配慮することは，次のことである。

作品を鑑賞し合う時間を確保する

作品を作ることでこだわりが生まれる。今度はゆっくりと鑑賞し合い，観点を教えて高める指導が必要になる。また，鑑賞できるいい作品にするには，教師の指導は欠かせない。そこで，卒業記念文集の英詩作りを例にして，詳しく述べてみることにしたい。

4．感性を育てる英詩の指導

私は中学3年間の表現活動の最終段階として，ハードカバーの卒業記念詩集（約1,600円～2,000円）を作っている。ハードカバー（通常より600円プラスになる）にする理由は，ずっと大切にしてほしいという教師の願いと，それによって生徒の作品へのこだわり方がずいぶん違ってくることからである。

（1）英詩の指導の実際

実は，年間計画でご紹介した活動は，この詩集作りのためのプロローグ（序章）なのである。Finishがきちんと定まっているので，いろんな活動が系統的，計画的に実践できるのである。私は，この詩集作りを楽しみにしている。生徒たちの感性に驚かされることが多いからである。教師が楽しく活動できることが，結果として生徒を育てることになるのだということを私は声を大にして提言したい。

さて，自分の目で見て，自分の耳で聞いた驚きが自分のことばとなって表れる時，詩が生まれる。詩は作者の想像力の産物であり，同時に読者の想像力に訴えるものである。私は，優れた詩（手本）について学習するうちに，自分の好きなものが自覚できるようになり，自分のことばを発見することができるようになると考えている。

しかし，概して生徒の詩はことば足らずのことが多い。知っている単語の数も限られているし，発展のさせ方もよくわからないのである。鑑賞の仕方もまだ未熟である。そこで，私はこう指導している。

① 自分の選んだ題材について，思いつくこと（文）をできるだけたくさん箇条書きで書きなさい。最初から英語で書いていきなさい
② 出尽くしたと思ったら，順番を並べ替えたり，足りないことをつけ加えたりしなさい
③ 順序を逆にしたり，不要な部分を削ったりしてみなさい
④ ひらめきが起きるのを待って（ある期間あたためて）もう一度見直しなさい

こうして詩が生まれる。次のような詩が出てきた。しかし何かが足りない。私は，最初に書かれた詩を見て（　）のように聞いた。

◇ ◇ ◇　A Very Small Picture　◇ ◇ ◇

There was a very small picture.
（それは，どこにあったの？）
It was a common picture.
（普通の絵だけど，みんな見るんだね。不思議だね。何か説明があるといいなあ。）
One day, a man saw it and said,
"Oh, it is a trifling picture."
（「くだらない」というのは，どんな男の人なの？　その後その男の人はどうしたんだろう？）
A college girl student saw and said, "It's a very sad picture."
（悲しいことを何か動作で表せない？　彼女はその後どうしたの？）
Then a little girl saw and said,
"It is the best picture I ever saw."
（男と女と少女のコントラストを読む人にわかるようにしたらいいんだけど…。）
This picture was called heart picture.
（心を写す絵なんだ。）「鏡なんです」
（あっ，鏡なんだ。じゃ，そう書くといいなあ。）
It showed people's hearts.
（すごくいい詩だよ。最後があっさりしていて，もったいないね。もうちょっと工夫してみようよ。）

その後，彼女は次のように詩を完成させた。

◆ ◆ ◆　A Very Small Picture　◆ ◆ ◆

There was a very small picture in the gallery.
It was a very very common picture.
Many people visited the gallery every day.
Every person stopped in front of the picture.

One day, a fat and rich man came to the gallery.
He saw it and said, "It's a trifling picture."
He spat and went away.
A girl college student saw it and said,
"Oh, this is a painful picture."
She took her handkerchief and wiped her tears.
Then a little girl came to the picture.
"Wow ! This is the best picture I ever saw."
People call it "heart picture".
This is the picture which people can see into their own hearts. Why is that ?
Because it is not a picture.
It is a mirror.
It is a mirror which shows our own hearts.
And today, too,it is waiting for your coming in the gallery.

見違えるような変身である。

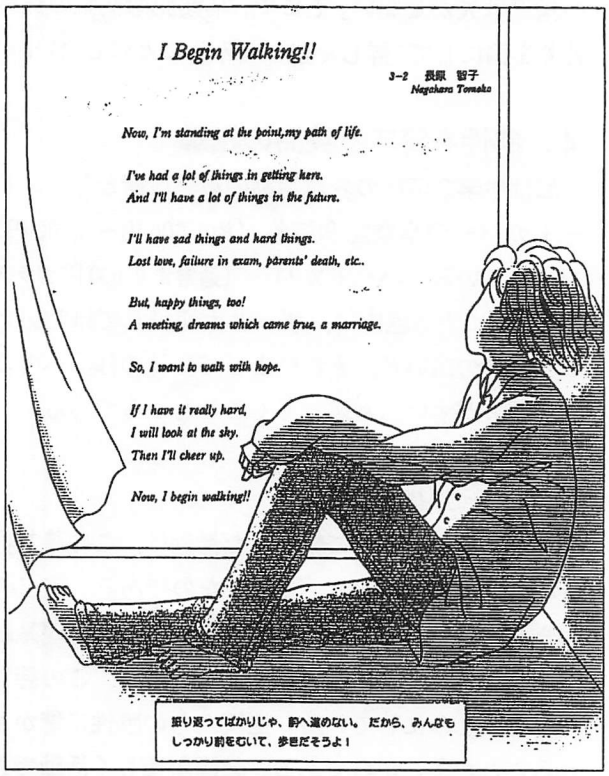
つまり，初稿の時に，生徒が言いたいことを十分に表現しているかどうかに気づくことが大切なのである。生徒の作品を読み深めるためには，場面を思い描き，何が足りないのかを知り，その子がどう関わっているのかを想像してみることだ。これをきちんと行なわれなければ，人の心を動かす詩も生まれないと私は考えている。そこで，私は生徒がていねいに考える姿勢を身につけられるようになるまで，継続して指導するようにしている。

しかし，現実にはなかなか時間がとれない。そこでよく使うのが，教科通信である。その中で，変容した詩（前と後）の実例を示すのである。教師が配慮することは，必ず授業の中で教科通信を渡すということである。そして読む時間を十分にとる。静寂が訪れ，あちこちでため息が聞こえるようになる。それは，高まりが広まり，深まりに変わる瞬間でもある。

（2）実践を広める

この教科通信は同僚を巻き込むのにも有効だ。事前にこんなことをやりたいんだけど，と口で言っても「自信がない」となかなか同意してもらえないことが多い。そこで，生徒の作品が載った教科通信（具体）を見せ，どの詩が好きですかと聞く。生徒の感性に触れ，指導の具体を知った同僚は興味を持ち，指示や発問の仕方を詳しく知ろうとする。担任にも見せる。こうして，担任も含め学年全体を巻き込んでプロジェクトが進んでいく。私は，実践は1人よがりで進めるものではなく，このように学年全体で取り組むべきものだと思っている。

こうして，今年度も卒業詩集ができた（下資料）。



ある生徒が次のように英詩の感想を書いている。

「最初は辞書を一生懸命めくりながら，1文字1文字書いていきました。そうするうちに，心が入ってくるようになりとても楽しくなりました。日本語にしてしまうとテレくさい言葉も，英語で書くととてもステキに見えました。（K．K．）」

5．最後に

生徒も教師も楽しくなる授業について述べてきた。今日のように，いじめ，不登校，問題行動に揺れる学校では，それがとても大事な視点だと考えている。その楽しさは豊かな心を育てることにつながる。もっと生徒と人間性を通じ合い，心と心のつながりを持っていきたいものである。私は，自己表現や詩作りは，教師と生徒，生徒同士が心と心をつなぐ架け橋であるような気がしてならない。

（なかしま・よういち　富山・砺波市立出町中学校

特集

魅せます!! 私の授業—自己表現と読みとりの指導—

力のつく「超」楽しい授業の秘密
—中嶋実践を読み解く—

富山新英研サークル

〈参加者〉
- 中嶋　洋一　（出町中学校）
- 宮腰　律子　（高岡西部中学校）
- 久保　槇雄　（富山商船高専）
- 長山　昌子　（高岡女子高校）
- 海木　幸登　（高岡南高校）
- 瀬戸　久美子（戸出中学校）
- 森田　康寛　（福野中学校）

中嶋実践を分析する富山新英研のメンバー

1）中嶋実践を読み解く

私たちは，中嶋実践の特徴を，現在のところ，次のようにとらえている。

（1）内容が多彩で，創造的である
（2）3年間を見通した系統性・計画性がある
（3）個人の実践に終わらず，学年・学校全体の実践になっている

たとえば中嶋実践では，英語の歌，英詩づくり，カードを使った文法・文型学習，ペア学習，Show and Tell，ディベート，スピーチ，パソコンを使った story writing などの実践が，次から次へと飛び出してくるのである。それはまるで，魔法の箱から実践を取り出す魔術師のようだ。

しかも，その実践の一つひとつが，同種の実践とは一味ちがっている。歌の実践ひとつを取り上げても，具体的な指導法など，実践を支える部分は，ユニークで，アイデアに満ちているのである。

また，その実践を支えるエネルギーのスゴサも，中嶋実践のきわだった特徴だ。

したがって，初めて中嶋実践を聞いた先生方の反応は，「スゴイ！」「感動した」という声になって表れるが，反面，「具体的なやり方が見えない」「私にはできない」「あの人は超人だ」というような声も多くなる。実際，「中嶋さんはいつ寝ているの？」という声も聞かれるほどなのである。

しかし，私たちは，中嶋実践の真髄を伝えることは可能だし，中嶋実践は，誰にでも出来る実践なのだと考えている。言いかえれば，中嶋実践が特別な実践ではないというような現実を，作り出すことができるはずだと考えているのである。

中嶋実践を読み解き，私たちの共有財産としていくために，2つのアプローチが考えられる。

1つは，報告する実践をできるだけ絞り込み，細部を詳しく書くという方法である。これは，本特集で，中嶋さん自身が担当する（8～12頁参照）。

そしてもう1つは，中嶋さんの半生記から迫るという方法である。私たちは，こちらのアプローチで，

中嶋実践を読み解くことに挑戦したい。

2）座談会：「私の英語教師年表」

'96年1月，中嶋実践を読み解くために，NEAT（富山新英研）では，座談会「私の英語教師年表―いかにして英語教師になったか―」を開いた。

それによると，中嶋さんは，中学時代からビートルズにのめり込んでいた。小遣いはほとんどレコードに消えてしまうという状態だったのである。

そして，英語の授業で歌をやってほしいなあと思い続けていたのだが，残念ながら，中学時代の先生も，高校時代の先生も，その期待に応えてはくれなかった。

中嶋さんは，この頃から，英語の歌を授業で教えるような教師になりたいと思っていたようだ。

高校では，英作文の授業に興味をもった。1つの文がいろんなふうに表現できるということを知り，英語で表現する面白さを知った。そして，大学ではnativeの先生の授業に多くふれ，ますます英語への興味が深まっていったのである。

3）中嶋さんの「英語教師年表―教師編―」

荒れた生徒と英語の歌

さて，1979年，いよいよ英語教師としての生活が始まる。埼玉の中学で6年間教えることになるが，勤めた学校は，荒れた地区の中でも一番荒れた中学校だった。学生服（長ラン）の裏にナイフを隠しもっている生徒がいるような状況であった。

ケンカを止めに入って，なぐられたこともあり，その時の傷は，今も残っている。

確かに，つらい思いもずいぶんしたが，ギリギリのところで生徒とわたりあった経験は，中嶋さんを鍛えてくれたと言えるだろう。

ところで，この頃の授業は，受験指導中心で，教師主導型の授業だった。生徒が主体的に自己表現をするという現在のスタイルからは程遠い授業だったのである。

授業が成り立たず悩みもしたし，生徒とやりあったこともずいぶんある。しかし，当時は，生徒の内面には気づかず，「話を聞かない」「指示通りに動かない」「課題をやらない」などと，まったく教師中心の考え方をしていた。

そんなある日，英語の歌が好きだと常々話していたからだろうか，荒れた生徒の1人が，授業で歌をやってほしいと言ってテープをもってきた。

それがBilly Joelの"Honesty"だった。

思い切って授業でやってみると，驚いたことに，いつもは騒然となるクラスの生徒たちが，楽しそうに歌ってくれたのである。中嶋さんにとっては，ことばにならないくらい，うれしい衝撃だった。

英詩づくりとの出会い

1981年。奥住公夫氏（埼玉新英研）に出会ったことが大きな転機をもたらした。生徒の自己表現（英詩）との出会いである。

中嶋さんは，生徒作品の素晴らしさに魅せられて，すぐに英詩作りを始める。

教師開眼ともいうべき年だ。

林野氏の『たのしい英文法』（三友社）にも出会い，『新英語教育』の購読を始めたことで，中嶋さんの実践は一気に加速する。

こうして英語の歌と英詩づくりの実践が，中嶋実践の両輪になっていった。歌の実践の年間計画ができ上がったのが，1983年である。

小学校教師として―授業開眼―

ところで，中嶋さんは，長男であるため，富山へもどってくるようにと親から言われ続けていた。年齢的にもいよいよラスト・チャンスということで，採用のある小学校教師として受験。採用が内定した。そのため，玉川大学のスクーリングを含め，短期間に何本ものレポートを書くという経験をする。普通なら2～3年かかるところを，必死の思いで3カ月でクリアした。

中嶋さんは，当時をふり返って，この時ほど勉強したことはないと言う。そして，この時の勉強が，間違いなく自信につながっている。

こうして1985年，小学校教師中嶋洋一が誕生した。以後3年間，中嶋さんは，小学校教師として，授業とは何かということを考え始める。

たとえばローソクの実験の思い出がある。銀紙で筒をつくり，ローソクの芯にかぶせると，気化したロウが筒先で燃えるという実験である。この実験をすると，芯が燃えると思っている生徒たちから，驚きの声があがった。

授業には驚き・発見がなければならないということに，中嶋さんは気づいたのである。

また，気球づくりの実験も思い出に残っている。黒いゴミ袋を張り合わせて，5メートルくらいの気球をつくり，掃除機で空気を送り込む。これを寒い日の朝，外へ出しておくと，中の空気があたたまり，自然に気球が浮かんでいく。

これもまた，生徒が歓声をあげる実験の1つだった。そして，中嶋さんは，授業とは，本来，こんなふうに楽しいものなんだ，と実感したのである。

しかし，中嶋さんにとって本当の転機になったのは，この後の学校訪問である。

ある年，中嶋さんは，「豊臣秀吉」の研究授業をする。そして，その授業だけが，指導主事から，全員の前で酷評を受ける。

教師中心，説明中心の授業への批判である。

ところが，中嶋さんは，このくらいではへこたれない。もう一度，生徒が活動する授業に組み立て直し，同じ指導主事に，再訪を要請する。

こうして，いわば“リターン・マッチ”を制した中嶋さんは，以後，生徒主体の授業づくりを進めていくことになる。

さて，小学校時代の中嶋さんについて，もう1つ，どうしても紹介しておかなければならないエピソードがある。

それは，毎日の帰りの会で，英語の歌を歌っていたということだ。年間なんと60曲。

同時にphonicsも教えていたため，次の年に，中嶋さんの生徒たちが驚異的な成績をおさめていることを中学の先生から聞かされる。

中嶋さんらしいエピソードだ。

中学校へもどる

こうして小学校で変身をとげた中嶋さんは，1988年に，いよいよ中学校へもどることになる。

中学校では，担任，学年主任，研究主任，生徒指導主事などの仕事をこなし，授業では，自己表現とペア学習にのめり込んでいく。

中学でも，指導主事から指導を受けたことがある。「自己表現より基礎・基本が大切」というのである。しかし，自己表現活動の素晴らしさに確信をもった中嶋さんは，黙って受け入れることはせず，堂々と論争を挑んでいった。

こうして中嶋さんの英詩実践は，1989年，初めてのハードカバー詩集に結集し，以後，1991年，1994年，1995年のハードカバー詩集へと，いわばバージョン・アップするのである。

現在の中嶋さんは，スピーチ，ディベートなどのコミュニケーション活動に積極的に取り組んでおり，自己表現とコミュニケーションというテーマを追いかけているように見える。

このテーマは，新英研にとっても，日本の英語教育全体にとっても重要なテーマであり，中嶋実践が今後どのように発展していくか，私たちとしては，大いに期待したいところだ。

また，今回はあまりふれられなかった点だが，ペア学習の重視という面も無視できない。これも中嶋実践の大きな魅力の1つであり，私たちとしても，積極的に取り組んでいきたい課題である。

さて，本特集では，読者である私たちに中嶋さんから，ボールが投げられた形である。

とくに今回は，自己表現という視点を通して問題提起がなされたと思う。

あとは私たちの出番である。このボールをしっかり受けとめ，肩肘はらず，授業づくりの面白さを追究していけたらと思う。とくに若い先生たちがどう受け継ぎ，自分流に発展させてくれるか，興味と期待は尽きない。

※最後に，1つお知らせ。3月23日（土）～24日（日）の2日間，富山市において，ヤング・セミナーを開催します。企画・運営，講師を，富山県の若い先生たちが担当する，ワークショップ形式のセミナーです。全国からの参加をお待ちしています（詳細は62頁参照）。

（まとめ／かいき・ゆきと　富山県立高岡南高校）

特集

魅せます!! 私の授業—自己表現と読みとりの指導—

英語教師として大きくなるために
—中嶋実践と萩原実践に学ぶ—

大浦 暁生

教師は自らを育てる

中嶋さんと萩原さんの実践と，実践についてのコメントを読んでまず感じるのは，教師が自らの個性を大切にすることがいかに重要かということだ。自分の個性に合った実践をのびのびと行なうとき，教師は持っている力を十二分に発揮できる。中嶋さんは他人からユニークだと言われる実践を「自分では当たり前だと思っている」と述べているが，こうした自然さが中嶋さんを解放している。萩原さんにしても，自分がもっともいいと信じることを，ごく普通に実践しているにすぎない。

かりに中嶋さんが萩原さんの港北高校に移って，同じ子どもたちに教えるとしたら，授業の姿は萩原さんとはかなり違ったものになるだろう。萩原さんが出町中学校へ行ってもやはり違う授業になると思う。もちろんこれは，どちらの授業がすぐれているとか，互いに相手の授業を無視するとかいった問題ではない。2人とも相手の授業を十分に尊重し，それに学びながらも，自分の個性を生かした別の授業を創造することになるのだ。

16～17年目というほぼ同年の中堅教師だが，どちらも授業がうまくいかなかった失敗の経験を持っている。優秀な教師であることに間違いないが，けっして並みはずれた天才ではない。2人をすぐれた教師にしたものは，自らの失敗に学び（小学校教師時代，中嶋さんは「豊臣秀吉」の研究授業を子ども中心に組み立て直して，再度挑戦した），さまざまな理論や実践を研究してきた（萩原さんは主要な英語教育雑誌3誌をすべて購読し，本を数多く読む），そのたゆまぬ努力だ。

教師は自らを育て，成長させることができる。実践を重ねる中で自分自身を発見し，一歩一歩大きくなってゆく。中嶋さんはもともと歌や詩が大好きだった。そうした自己を再発見したことが，英語の歌の活用や卒業記念詩集など現在の実践につながっている。萩原さんも教師になってまもなく新英研に接し，さまざまな実践を試みてきたことが，しだいに実を結んできた。教師は自己の力量を自らの努力によって創りあげてゆくのだ。

子どもと授業を創る

教師は自らを育てるといっても，授業実践によってしか育たない。子どもとともにしか自分を変えることはできない。これが他の仕事と違うところだろう。中嶋さんが英語の歌を授業に持ち込んだのは，ひとりの「荒れた」子どもが授業で歌をやってほしいと“Honesty”のテープを持ってきたためだった。萩原さんの「読むための英文法」は，どこまで理解しているかわからない子どもの実態を見つめることが，リーディングに文法を生かせないかと考えたきっかけになっている。

何年も前の教育研究全国集会で，「英語があって子どもがあるんやない。子どもがあって英語があるんや」と言った大阪の教師の発言が，いまも心に残る。教師はまず子どもたちの実態をつかまなければならない。授業という人間的成長の場で，子どもは教師がともに学びあうパートナーであり，教師は指導的な役割を果たしはするが，子どもなしに授業は成立しない。教師自身の持ち味と子どもの現実に合わせて，教材と授業方法もきまってくる。

萩原さんが高校2年生にキング牧師の"I Have a Dream"を全文与えて失敗したことは，いかに真実性ゆたかないい教材でも子どもの実状に合わなければ力を発揮しないことを示している。中嶋さんがすぐれた教師として開眼したのは，受験指導中心の教師主導型授業から，子どもの自己表現を中心とする授業に転換したときだった。「教材」と言っても単に読みとり教材だけでなく，文法にも自己表現にもすべて教材が必要だ。中嶋さんの場合は英語の歌，英語づくりの手本となる先輩たちの詩なども重要な教材となる。

子どもの現実を見る場合，未熟な面を把握しながらも，プラスの面を積極的に評価する姿勢が大切だろう。どんな子どもにもかならずいいところがあるという信頼感に裏打ちされてこそ，子どもたちとともに学習の成果をあげることができる。中嶋さんはいいところをほめて励ましながら子どもの潜在的な力を引き出しているし，萩原さんにもきちんと教えればかならずできるようになるという確信がある。2人の実践の根底に子どもたちへの信頼がずっしりと存在していることを見逃してはならない。

学習動機の内発化

それでは2人の実践から学ぶべきこと，さらに期待したいことなどを，個々の実践に即して私なりに述べてみよう。

まず中嶋さんの実践だが，第一におもしろいと思ったのは，教科書をまとめに使って時間を生み出すことだった。「教科書中心に内容を教えるよりも，それをまとめとして扱うほうが力がつく」という。教科書は一般向きに作られたものだし，自分の個性と子どもの現実に何がいちばん適しているかは教師自身がだれよりもよく知っている。教師が自ら用意した教材と方法を主体に授業を編成し創造するのは当然の話で，とりわけ入門期にはそうしなければ授業ができない。授業の自主編成権は現場教師にあることをあらためて確認しておきたいが，中嶋さんのおもしろい点は，教科書を無視せずまとめに使い，実質的な自主編成を獲得していることだ。

こうして教科書の呪縛から解放され，自由な授業空間が広がる。ここでおもしろいのは「遊び心」を大切にすることで，中嶋実践の真髄と言えよう。子どもはからだを動かして遊ぶことが大好きだという点に着目し，子どもたちが自分からすすんで行なうような楽しい活動を数多く仕組むのだが，そうした活動を用意する中嶋さん自身も創造的な「遊び心」を大いに働かせている点に注目したい。

「遊び」と気楽に言うが，実は外から教え込むのではなく，子ども自身が内から自発的に学ぶ主体的な学習を組織することにほかならない。中嶋さん自身が言うように，「内発的動機づけで学習を楽しく」するのだ。たとえばI — my — me — mineなど人称代名詞の格変化をただ機械的な繰り返しやテストで覚えるのは「外的動機づけ」にすぎないが，カードゲームの方法を持ち込むことで動機はたちまち内発化することになる。

これこそまさに子どもを主人公とする授業の創造ではないか。子どもは「遊び」ながら楽しく学習し，教師は子どもの自主的学習を助ける役を果たす。中嶋さんは授業には新しい発見が必要だと主張するが，発見をするのは子ども自身であり，そのための教材や手だて（具体的でわかりやすい指示や発問など）を考えるのが教師の楽しみと言えよう。こうした学習の発展として自己表現があるのは当然で，卒業記念詩集はその集大成なのだ。

中嶋さんの英詩指導を見ると，まず思いついたことをたくさん書かせ，それから順番を変えたり書き足したりして系統だててゆくといったふうに，自分の言いたいことを表現しやすいような指示がきちんと与えられている。初稿に中嶋さんがさまざまな問いかけや励ましを与え，それによって子ども自身が自分をさらに発見し，表現を発展させてゆく。その発展過程を教科通信で全員に還流し，授業で活用するのもすぐれたアイデアだ。こうしてできあがった子どもたちの詩には，自分で発見した自らの姿，自己の生き方がはっきりと表れている。

中嶋さんの実践は多様だが，一見個々別々の遊びのようにみえても実は計算された学習の論理が存在し，年間，いや3年間を見とおした系統的な総合編成がなされている。たとえばbutを学習して対立概念が持ち込まれ，話に広がりが生まれると，英詩づくりが始まるのだ。言語のきまりを系統的に教え

ることがおざなりにされ，子どもたちの基礎学力が大きく低下してきている現在，中嶋さんが年間編成をいっそう綿密なものとし，英語の自発的学習の筋道がさらに明らかになることを今後とも期待したい。

多様な読解の方法

萩原さんの場合も，教科書は授業計画全体の中で教材の一部として組み込まれ，教科の自主的な編成がなされている。高校3年生のリーディングについて言えば，教科書は精読教材として使われ，ほかに速読・多読の教材として，宮沢賢治の童話を英訳した"The Nighthawk Star"から日本軍の残虐行為を扱ったマレーシアの教科書まで，さまざまな教材がプリントで投入される。また，「読むための英文法」として，読解に実際に役立つ文法がシリーズで導入され，自力で英語の文章が読める力をつけるための年間編成が着実になされてゆく。

しかも，読解の方法は型にはまった訳読ではなく，文頭からフレーズごとに意味をとっていくフレーズ・リーディングのほか，教材に応じてさまざまな方法が適用される。物語文では日本語の質問を用意してその答えをみつけるために英文を読ませるスキャニングが使われ，説明文ではパラグラフの構成を考えて理論の展開を明確にしていくパラグラフ・リーディングなどが試みられている。

これまで考慮されることが比較的少なかった説明文の読解方法に示唆を与えた点は，読みとりの立場から見て大きな貢献だと言えよう。たしかに物語文では，多くはフィクションとして，登場人物の行動や心理を場面描写の中で描き，ストーリーを展開してゆく。それに対し説明文では，筆者の主張が論理的な説明によって直接的に論述される。そうした基本的な違いは存在するだろう。

しかし，座談会の中で磯山さんも言うように，説明文の読解でもスキャニングに似た日本語による発問は必要かもしれない。パラグラフ・リーディングは論の大筋をはっきりさせる点では有効だが，内容をもう一歩掘りさげるには急所をついた発問が威力を発揮する。発問にも大きく言って2つのレベルがあろう。ひとつは内容の「理解」のレベル，もうひとつは内容の「解釈」や「批評」のレベルだ。

たとえば，萩原さんが例に出したドナルド・キーンの日本文化論の一節，日本人の好みにかかわってサクラとウメを比較した文章（19頁左段英文）では，faintの意味を問うことが内容の理解を確実にするうえで欠かせない。「弱い」「かすかな」という否定的イメージでなく「ほのかな」「優雅な」という積極的イメージでとらえないと，次のbutとの論理がつながらないからだ。だが，そこまでの理解にとどまっていては，この場合の読解として物足りないと思う。「日本人は早く散るからサクラをウメよりも好む」という論旨を確認したうえで，もう一歩踏み込んでこの論の賛否を問いかけたい。その問いによって主体的な読みが深まるだろう。

おそらく実際の授業では萩原さんもさまざまな読解の方法を組み合わせて使い，この場合もパラグラフ・リーディングのあとで論旨についての批評を子どもたちにさせているにちがいない。また，「読むための英文法」は実にすぐれた試みで，たとえば「文はなぜ長くなる」として修飾語や接続詞を考えるところなど，子どものつまずきをたえず気にしながら読解の問題に取り組んでいなければとても生まれない発想だと思う。

できるところから

最後に，2人の実践を読んだ若い教師たちのために一言したい。

2人の実践はたしかにすばらしいが，新任当初からこんな実践ができていたわけではない。初めはむしろ失敗の連続だった。だから私たちも失敗をおそれず，1つでも2つでも自分にできることを試みよう。年間計画などまだとてもむりでも，完璧主義になる必要はない。他人の実践から大いに借用しよう。実践しながら勉強を続けよう。自分の内なる声に忠実でいよう。そのうちに自己を再発見し，自分独自のものがしだいにできあがってくる。

子どもが好きで，英語が好きなら，道はかならず開ける。忠実で，人間同士の信頼があれば，子どもたちはきっといっしょに歩いてくれるだろう。

（おおうら・あきお　中央大学教授）